一心寺かわら版

第二十一号　平成二十三年一月発行

謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

旧年中はご助力を賜り誠に有難うございました。

昨年は一年を表す漢字に「暑」が選ばれたように、長く暑い夏が印象に残りました。

また、チリで鉱山落盤事故があり、地下七百メートルの密室、気温三十度、湿度ほぼ百％という暑さの厳しい環境からの救出劇が大きな話題となりました。突然の災害に遭いながらも全員が無事に帰って来ることができた裏には、ルイス・ウルスアさんのリーダーシップがあったそうです。彼は、生き延びるために少ない食料を配分し、三十三人の融和に努めたそうです。自暴自棄になって争いが起きてもおかしくない極限の状況の中で、なぜ彼らは力を合わせ生き抜くことができたのでしょうか。それは、必ず助けが来ると信じていたからではないでしょうか。その信頼が、地上との連絡が取れるまでの十七日間、彼らを支え導いたのでしょう。そして六十九日後に無事、救出されたのです。

浄土真宗は私が今、阿弥陀仏の願いの中で浄土へ導かれる教えです。間違いなく助けて下さるそのはたらきを信心としていただいたならば、大いなるよろこびが生まれると親鸞聖人はお伝え下さっています。

本年は宗祖親鸞聖人の七百五十回大遠忌の年です。仏さまのはたらきを感じつつ、よろこびの一年となるよう共に歩んで参りましょう。

本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

合掌

下記、掲載の通り、七百五十回忌を記念して親鸞展が開催されます。聖人に関する文化財が数多く集まるまたとない機会です。期間中、京都に行かれる方は是非ご覧下さい。

親鸞聖人750回忌
真宗教団連合40周年記念

親鸞展

生涯とゆかりの名宝

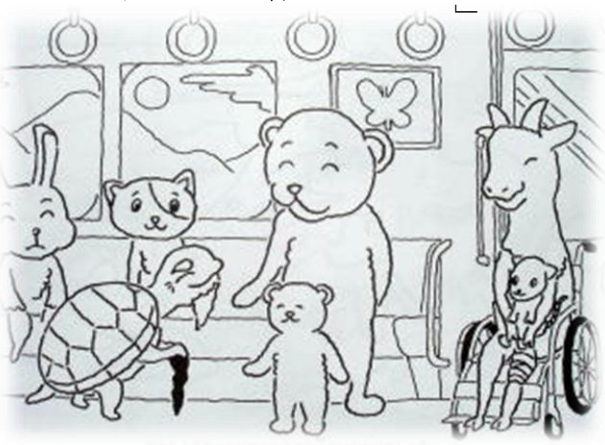
2011年3月17日(木)～5月29日(日)

京都市美術館

『『助ける』の意味って？」を読んで」

昨年十一月二十六日の四国新聞に、「全国中学生人権作文コンテスト」の受賞作が掲載されていました。その中で、高松法務局長賞に輝いた小亀未於さんの『『助ける』の意味って？」を読み、考えさせられました。その文章は次のように始まります。

「助けるって難しい。「体の不自由な人、障害のある人には優しく接しましょう。いたわってあげましょう。」小学校の教室で先生からはそう教わったけれど、いつでもどんな場合でもそれが本当に正しいとは私には思えない。相手を椅子に座らせてお客さんのように扱い、何から何までしてあげることが本当に「助けた」と言えるのだろうか。それよりも、自分の力でやりとげようとがんばっているときには、時間はかかるかもしれないけれど、手を出さずにそばで見守る。そして、できないところだけ手伝ってあげるのが本当の意味での「助ける」ことであり、結果としてそれが相手のためにもなる。」



確かにその通りでしょう。しかし、何をどこまですることが「助ける」ことになるのか、簡単には分かりません。人と接するときにまず考えるべきことは、お釈迦さまが

「どの方向に心でさがし求めてみても、自分よりもさらに愛しいものをどこにも見出さなかった。そのように、他の人々にとっても、それぞれの自己が愛しいのである。それ故に、自己を愛する人は、他人を害してはならない」

とおっしゃるように、みんな自分が愛しいのであるから、自分のことと同じように考えて人を害してはいけないということ、つまり、自分が嫌がることを人にしない、逆に自分が嬉しいことを人にしてあげる、ということでしょう。しかし、それだけでは十分でないことは言うまでもありません。なぜなら、自分が嫌なこと嬉しいことが他の人にとって必ずしもそうとは限らないからです。また、同一人物であっても、時と場合によって変わってきます。相手と、時と場合に合わせて「助ける」ということは大変難しいのです。

また、彼女が綴っている

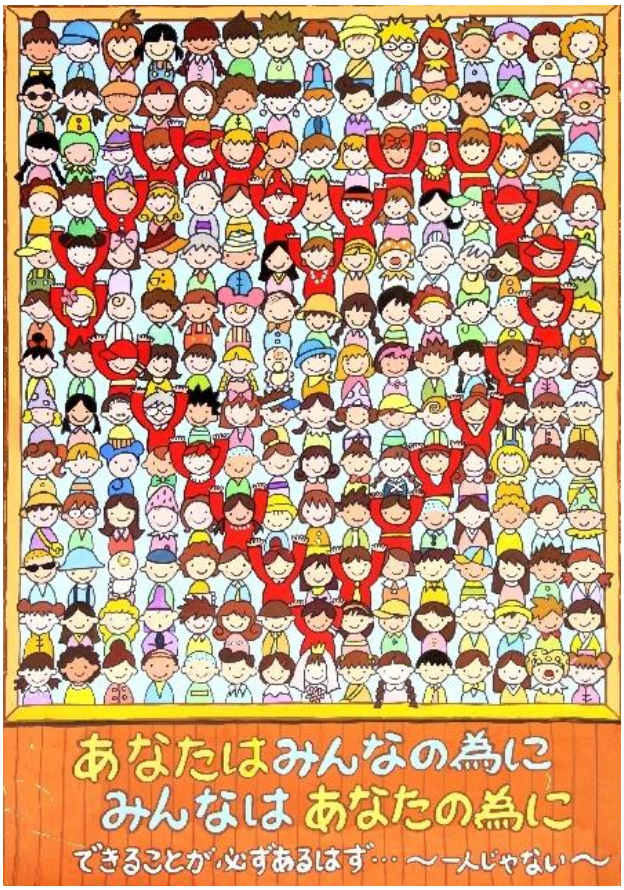
「私達は何も障害のない自分を当り前のように思ってはいないだろうか。目が見えること、耳が聞こえること、声が出せること…不自由のない本当はとても幸せな状況を、普段は意識せずに暮らしている。それなのにひとたび障害のある人と出会えば、今度は「私が普通であなたは不幸」と、富める者が貧しい者を哀れむような視線で相手を眺める、残念ながらそんな人が大勢いる。それも決して悪意などを意識せずに、である。」

ということを、自戒しなければならないでしょう。ここで言われる「私が普通であなたは不幸」と哀れむのは、以前、このかわら版の『仏教から生まれた日本語』で取り上げた「慢」という煩悩です。この他にも無数の煩悩があり、それが、「助ける」どころか、人を、自らを苦しめているという現実を否めません。

ではどのようにすれば、本当に「助ける」ことができるのでしょうか。彼女は

「障害のある人と付き合っていく上で、まず必要なのは、自然体で相手を受け入れ偏見を持たずに理解することだと思う。何も知らずに不用意に接するのも必要以上に大げさに反応するのも、相手にストレスや苦痛を与えてしまうような気がする。軽すぎず重すぎず、相手が抱えている障害を正しく理解した上で接するのが一番良いのではないだろうか。正確に、そして深く理解することはとても難しいことだけれど、障害者や障害に対し、ほんの少し関心を持ち、その関心を持ち続けることが正しい理解に繋がっていくのだと思う。」

と言います。「助ける」ためには、彼女の言うように、相手をよく見つめ理解することが必要不可欠でしょう。本当は何を欲しているのか、聞くことができればそれに越したことはありませんが、できる限り傍にいて感じることが大切でしょう。



阿弥陀仏は五劫（〔ごこう〕一劫は四方上下百由旬の鉄城に芥子〔けし〕を満たし、百年ごとに一つの芥子を取り去って、その芥子全部を尽くしても終わらない、と譬えられる）もの想像を絶する長い時間、私たちの姿を見つめられて、どのようにすれば助けることができるのかを考えられたといわれます。この五劫という長さは、それほどまでに私のことを思って下さっていること、そして、私たちみなを「助ける」ことがそれほど難しいということをあらわしていると言われます。

浄土真宗は、南無阿弥陀仏によって「助けられる」教えです。親鸞聖人は

「すべての衆生は、はかりしれない昔から今日のこの時にいたるまで、煩悩に汚れて清らかな心がなく、いつわりへつらうことばかりでまことの心がない。そこで阿弥陀仏は、苦しみ悩むすべての衆生を哀れんで…」

と痛感しておられます。私たちみなが障害（煩悩）によって苦しんでいるので、仏さまは心配でたまらないのです。ですから一人残らず助けるために、誰もが受け取ることができるお念仏の声となって届けられたのです。

南無阿弥陀仏、仏さまに出遇い、ひかりといのちきわみなきはたらきを実感し、「助けられた」先人がいらっしゃいます。それが親鸞聖人であり、私たちのご先祖でしょう。

そして、彼女の文章は

「冒頭に戻るが「助ける」という日本語を訳せば「ヘルプ」と「サポート」という英単語が出てくる。「本人のできないことを本人に代わって手助けする」ことと「本人ができるようになるよう手助けする」ということ、同じ「助ける」でも大きく異なる。善意からの親切が要らぬお節介に代わることさえあるのだ。障害のある人にとって、その場、その時必要なのは「ヘルプ」なのか「サポート」なのか、それを取り違えぬよう自分のできることから始めていきたい、そう思っている。」

と結ばれています。

では、阿弥陀仏の救いは「ヘルプ」でしょうか、「サポート」でしょうか。私では、人間では気付かなかったさとりの世界へ導いて下さるという意味では「ヘルプ」のように思います。しかし、そのはたらきをいただいて歩んでいくのは他ならぬこの私です。その意味では「サポート」でしょう。他力に導かれつつ、自らの足でしっかりと仏の道を歩んでいくのが浄土真宗です。

お経ってなあに？⑨「十二礼」

七高僧の一人である龍樹菩薩（インド）が自ら阿弥陀仏の十二のお徳を讃えられた讃歌です。阿弥陀仏の功徳やその浄土の荘厳がすばらしいことを多くの人に知らせて、浄土に生まれるよろこびをともにしたいと願われて詠ったものです。前回紹介した中国の善導大師が『往生礼讃』にこの讃文を収め、これを称えて礼拝する行儀をお示しになりました。

当山では宵・朝と二日間に渡り法事が営まれた場合に、よく勤めていたようです。現在は宵法事が減ってきたため勤める機会が減ってきましたが、中讃地方では、今でも念入りの法事といって、数人の僧侶で太鼓を叩きながら勤めているようです。本山の法要では三鼓（羯鼓・太鼓・鉦鼓）を交えて賑々しく勤めています。

お経や正信偈が平調（ひょうじょう：洋楽ハ調のミ）を基本の音にしているのに対し、盤渉（ばんしき：洋学ハ調のシ）を基音とし、非常に高い音で唱えられるため明るく音楽的なお勤めです。

ちょっと一言

お参りをさせていただいていると気になることがあります。それは御本尊で、阿弥陀如来の御絵像、お名号が傷んでいることがあります。市販の御本尊は印刷で、表装もきちんとされていないことが多いため、傷みやすいようです。本山から下付されるものは、絵具を使った手仕事のため古くなっても色彩が映え、表装がしっかりしているためほとんど反り返ることがありません。宗祖親鸞聖人七百五十回大遠忌を前に、御本尊を本山から新しくお迎えしてはどうでしょうか。